

東北畜産の将来と技術研究

石 埜 三 郎

(東北農試)

東北地方の畜産の現状は残念ながら零細規模のものが大部分であって、乳牛について言うと昭和40年度で乳牛の農家1戸あたり飼養頭数は平均2.4頭で全国平均の3.4頭よりも低く、この零細な飼養規模から抜けだし多頭化することが東北畜産の問題である。家畜とくに牛飼養の多頭化を進めるためには、飼料基盤の強化と、飼養管理労力の節減をはかることが必要である。

家畜の飼養規模を多頭化するためには飼料基地の拡大が必要であるが、農家が現在の耕地に隣接したところで耕地規模を拡大することは現状では極めて困難な場合が多いであろう。

近年、当地方で山地に公営の草地が多く開かれているが、これは農家が多頭化するための飼料基地の強化、拡充に役立つものと考えられる。東北地方の草地は約33万haあり、その大部分は未改良の自然草地であって、この畜産的利用の将来は期待されるところ大きなものがある。したがって草地の開発と利用とに関する技術研究は重点的に進めるべきである。

まず、開発されようとする草地は大部分傾斜地であるから傾斜地における草地の造成と維持管理、牧草栽培、土壌保全、農機具利用、家畜の放牧利用法などが問題となる。次に公営の草地は規模の大きいものが多いので、大型の機械を使った単位面積あたり労力のあまりかからない、大量の生産物を取扱い処理する技術の体系を確立することが必要である。

また、当地方では気象条件の関係で一年の半分以上は生草に恵まれず貯蔵粗飼料に依存せざるを得ないので、良質のサイレージと乾草を得るための調製法、保存法と利用法などが研究課題となる。

次に多数の家畜を飼うと飼養管理労力の節減が問題とってくる。将来農業労力が減ってゆくことを考えればなおさらである。

もともとわが国の乳牛飼養は明治時代、外人に牛乳を供給する牛乳屋的な乳牛飼養から発達し、わが国の農地が狭少な関係もあって、乳牛を放牧飼養する習慣が少なかった。しかし放牧することによって飼養管理労力を大幅に減らすことができるし、技術的にうまくやれば放牧と刈取り給与方式とで1頭あたり飼料負担面積には大きな差はないものと考えられる。このような集約的な放牧

技術についての試験研究が必要であろう。

公営の草地など規模の大きい草地の放牧については多頭数の牛群を放牧するのでその生態に基づいた適当な庇陰林、避難舎など施設の位置と様式、放牧牛の採食量調査に基づく牛の栄養の適正化牛群のグループ分け、アブなど外寄生虫の駆除ピロプラズマ病を始めとするいわゆる放牧病予防の技術を早急に確立しなければならない。

飼養管理労力については将来当地方に専業酪農家の増えることが考えられるが大部分の乳牛飼養農家は依然として複合経営のまま残ることが予想されるので水田における農作業との関連は十分に検討すべきであろう。

乳用子牛の育成については、当地方の公営草地はただ地元農家の預託を受けて育成するだけでなく、将来他地域、例えば広く関東地方における搾乳牛の更新用としての全国的な乳牛育成基地となることも考えられ、子牛の集団的な育成技術の開発が望まれる。

肉牛については東北地方は広大な山地面積を持つことから、将来はわが国における有力な肉牛の生産地となるであろう。このため混牧林あるいは自然草地における肉牛の放牧管理技術を確立することが必要である。自然草地は一般に生産力が低いから生産性をあげるために、経費のあまりかからない不耕起造成法などによって牧草の導入をはかることが望ましい。夏は放牧でよいが、冬季貯蔵飼料の確保や生産される子牛の育成や肥育のために、肉牛においても人工草地の利用が必要である。このように自然草地と人工草地との利用を組合せた肉牛の生産、育成、肥育にわたる一貫した技術体系の確立が望まれる。また当地方で飼われている乳牛から生産される乳用雄子牛を肉用素牛として牛肉生産に役立たせることも重要であって、この方面についても草地を利用した実際的な技術の開発が必要である。

当地方における養豚や養鶏については、市場が遠くまた輸入濃厚飼料を安価に入手し難い不利な点がある。これらの発展は全国的な情勢の如何に左右されるので断定的に考えることが無理であるが、まづ当地方の畜産としては乳牛と肉牛とが問題であろう。

結局東北地方における畜産の発展には、山地、傾斜地の利用が不可欠であって、ここに東北畜産の将来の特徴があると考えられるのである。